17	刈谷	刈谷市立朝日学校	ムラハシ　ショウ 名前　村橋　翔

分科会番号	2	分科会名	外国語教育　（　　）

研究主題

知識を習得し、活用して表現する生徒の育成

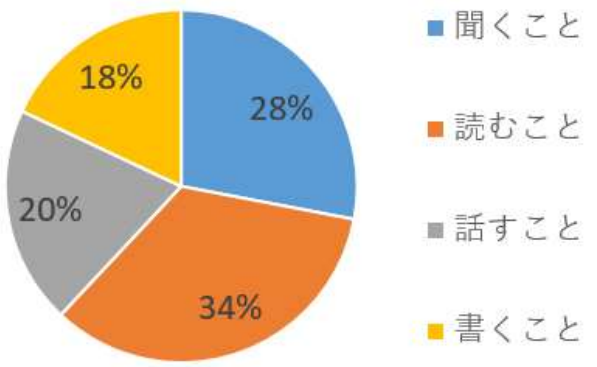
～２年　Let’s talk about school lives and rules～の実践を通して

１　主題設定の理由

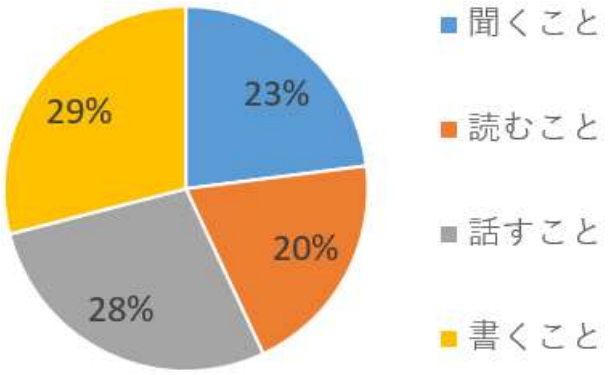
学習指導要領では「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す」と記されている。また、グローバル社会において、外国語を用いてコミュニケーションを図る能力が、あたりまえのように必要とされている。このような社会で生きていくために必要とされる、英語科における知識・技能を身に付けさせたいと考えた。

年度当初に、生徒の英語学習に対する意識の実態把握を目的としたアンケートを実施したところ「読むこと」に対して「比較的得意」と感じている生徒が多いことが分かった【資料１】。一方で「話すこと」と「書くこと」に関しては「比較的苦手」と感じている生徒が多く、さらに「書くこと」と「聞くこと」ができるようになりたいと感じている生徒が多いことが分かった【資料２】【資料３】。

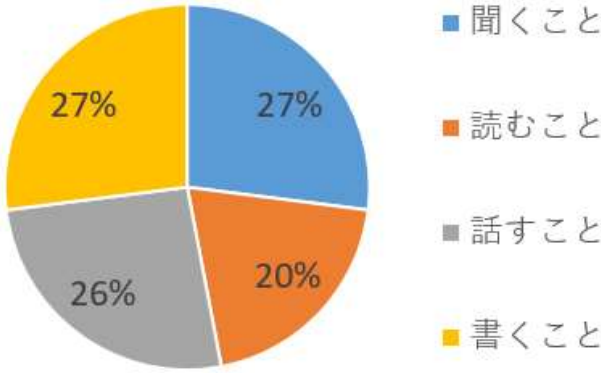
これらの結果を踏まえ、生徒の「できるようになりたい」という思いを尊重しながら、グローバル社会で生きていくために必要な英語の知識・技能を身に付けさせたいと考えた。「聞くこと」と「書くこと」の能力を高めるための学習活動を中心におきながら、表現するために必要な知識を習得させ、外国人に向けて表現する場面を設定し、研究を進めようと考えた。そこで、研究主題を「知識を習得し、活用して表現する生徒の育成」と設定した。



【資料１】英語の学習で比較的得意な活動



【資料２】英語の学習で比較的苦手な活動



【資料３】英語の学習で、できるようになりたいこと

2　研究の方法

（1）目指す生徒像

・英語で表現するために必要な知識を習得する生徒
・習得した知識を活用して表現する生徒

（2）研究の仮説

仮説１：単元の導入段階において、生徒が知識を習得したいと思える工夫をし、英語表現を身に付ける段階において、文構造カードを使って、語順を確認しながら学習を行えば、英語で表現するために必要な知識を習得することができるだろう。

仮説２：知識の活用段階において、学習した文法を使って英作文を行う振り返りシートを継続的に活用し、英文を書く段階において仲間と関わり合いながら活動すれば、習得した知識を活用して表現することができるだろう。

（3）仮説に迫る手だて

仮説１に対する手だて

手だて①：英語表現に必要な知識を習得したいと生徒が思える単元導入の工夫

単元の導入で、日本の学校生活や校則について興味のある外国人から「朝日中学校の学校生活や校則について教えて欲しい」という依頼を受けたことを説明する。その後、実際にその外国人からのビデオレターを視聴する。生徒はたち外国人の依頼に応えたいが、今の自分たちの知識だけでは不十分だと感じるだろう。そこで、依頼に応えるために必要な知識を習得したいという思いをもつと考えられる。

手だて②：文構造カードを用いた、英文中の単語の語順確認

本単元で学習する文法は「have to + 動詞の原形」と助動詞「must」が中心となる。have の後ろに動詞の原形を入れたり、助動詞は動詞の原形の前に入れたりするなど、単語の語順が複雑になって、生徒は混乱することが考えられる。そこで、文構造カードを用いて、新たな文法を学習する度に、語順を確認しながら知識の習得を目指す。

仮説２に対す手だて

手だて③：英作文を行う振り返りシートの継続的活用

授業の最後に、学習内容を振り返って感想を記入する振り返りシートを継続的に使用する。授業で分かったことや疑問に思ったことなどを記入するだけでなく、その授業時間内で学習した文法を用いて英作文を行う。この活動を継続的に行うことで、授業時間内で学習した知識を活用できようになると考えられる。

手だて④習得した知識を活用して、仲間と関わり合いながら英語で表現する場の設定

単元の導入で視聴したビデオレターには、朝日中学校の学校生活や校則についての質問が中心になっている。それらに対する返答を英文で書いて送るという場を設定する。個人で書くだけでは自信がもてなくて書けなかったり、表現が思いつかなかったりする生徒も出てくることが予想される。そこで、グループワーク形式で考える場を設定する。

（4）単元構想

<table>
<tr><th>時</th><th>位置付け</th><th>学習内容　学習課題</th><th>習得・活用の内容</th></tr>
<tr><td>1</td><td>願い・疑問の芽生え</td><td colspan="2">日本の学校生活や校則に興味のある外国人から「日本の学校生活や校則について教えてほしい」という依頼を受ける。
探究課題　朝日中の学校生活や校則を英語で説明しよう
~Let’s talk about school lives and rules~</td></tr>
<tr><td>2</td><td rowspan="6">習得</td><td>「～しなければならない」という表現を理解しよう
・校舎内では、上履きを履かなければいけない。
・学校は自分たちで清掃しなければいけない。</td><td rowspan="6">・(don’t) have to +動詞の原形で「～しなければならない・しなくてよい」という表現になる。
・助動詞 must・mustn’t は「～しなければならない・してはならない」という表現になる。
・動名詞~ing は「~すること」という表現になる。</td></tr>
<tr><td>3</td><td>「～しなくてもよい」という表現を理解しよう
・お弁当を持ってこなくてもよい。
・部活動に所属しなくてもよい。</td></tr>
<tr><td>4</td><td>「～してはならない」という表現を理解しよう
・廊下を走ってはならない。
・携帯電話を持ってきてはならない。</td></tr>
<tr><td>5</td><td>「～すること」という表現を理解しよう
・掃除をすることを終えました。
・給食を食べることを終えました。</td></tr>
<tr><td>6</td><td>学校生活や校則に関する情報を整理しよう
・無言清掃
・校訓　「まごころ」</td></tr>
<tr><td>7</td><td rowspan="4">活用</td><td>相手の立場を考えながら、習得した文法を活用して英文を書こう</td><td rowspan="4">・朝日中の学校生活や校則について英語で説明したり、外国の学校生活や校則について質問したりするために、学習した言語材料を用いて、原稿を書くことができる。
・質問に対する応答について理解することができる。</td></tr>
<tr><td>8</td><td>学習内容を活用し、質問したいことをまとめよう
・校舎内上履きを履きますか？
・制服を着なくてはいけませんか？</td></tr>
<tr><td>9</td><td>アドバイスをし合い、よりよい表現にしよう</td></tr>
<tr><td>１０</td><td>朝日中学校の学校生活や校則を英語で伝えよう</td></tr>
</table>

3　研究の実際

（1）抽出生徒について

本研究では、抽出生徒Ａの変容を追うことで、手だての有効性を検証していく。

生徒Ａは、落ちついて授業に取り組むことができる。年度当初の英語学習に関するアンケートの結果では「読むこと」は比較的得意だと回答した。一方「聞くこと」「書くこと」については比較的苦手と回答した。「外国人の依頼に応えるために、英文を聞き取れるようになりたい」「英文が書けるようになりたい」という思いをもち、苦手な「聞くこと」「書くこと」にも粘り強く取り組んで、知識を習得し、活用して表現する姿を期待したい。

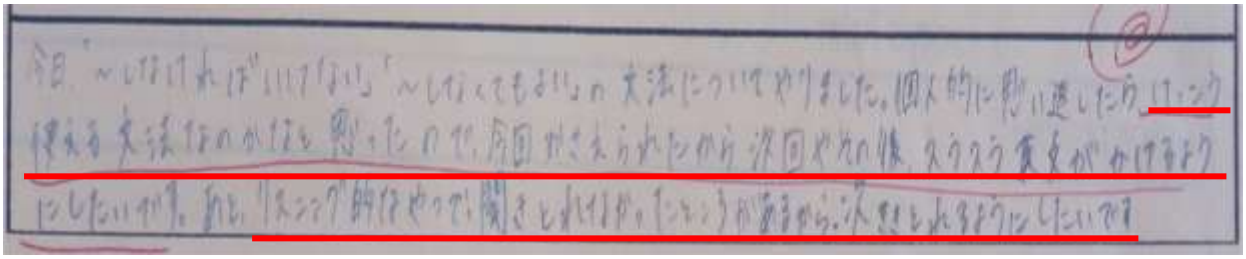
（２）実践と考察

①知識を習得したいという思いが芽生え始める生徒Ａ（手だて①）

教科書の Unit4 Homestay in the United States では、主に必要性や義務を表す「have to +動詞の原形」や、助動詞「must」を学習する。今回の言語材料を生徒たちが主体的に学ぶために、日本の学校生活や校則について興味のある外国人から「朝日中の学校生活や校則について教えてほしい」という場面を設定した。その後、単元の導入段階で、外国人から依頼を受けたことを生徒たちに説明した。そして、実際に依頼者である外国人からのビデオレターを視聴した【資料４】。

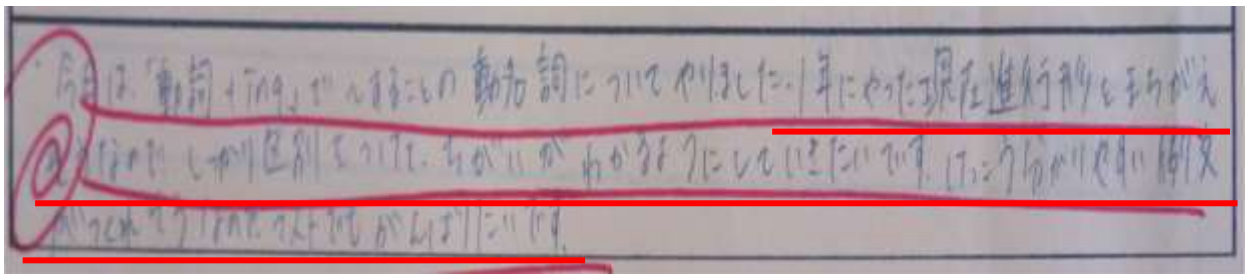
【資料４】ビデオレターを視聴する生徒

生徒Ａは、ビデオレターを視聴した際に、外国人が話す英語のスピードについていけず、内容の全ては理解できていない様子だった。その後、周りの生徒と話をして情報を共有したり、教師の補足説明を聞いたりしたことで、依頼の内容を理解することができた。「have to + 動詞の原形」「～しなければならない」という表現を学習した際に、生徒Ａの振り返りには「（外国人の依頼に応えるために）けっこう使える文法なのかなと思ったので、今回おさえられたから、次回やその後、スラスラ英文が書けるようにしたいです。リスニングで聞き取れなかったところがあるから、聞き取れるようにしたいです」という記述があった。依頼に応えるために、学習内容を身に付け、スラスラ英文を書けるようになりたいという意欲をもっていることが読み取れる。また、苦手な「聞くこと」に、前向きに取り組もうとしていることが分かる【資料５】。



【資料５】第２時　生徒Ａの振り返り

「動詞＋ing」の学習をした際の生徒Ａの振り返りには「１年にやった現在進行形をまちがえそうなので、しっかり区別をつけて、ちがいがわかるようにしていきたいです。けっこう分かりやすい例文がつくれそうなので、ラストでもがんばりたいです」と書かれていた。外国人からの依頼に応えるという最終段階を意識して、知識を習得していることが読み取れる【資料６】。

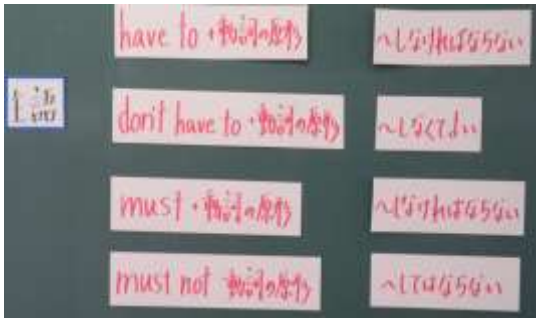


【資料６】第５時　生徒Ａの振り返り

「朝日中の学校生活や校則について教えてほしい」という場面を工夫して設定したことで、外国人の依頼に応えるために、英文法を学ぶ必要性を感じることができたため、意欲的に学習に取り組み、知識を習得することができたと考えられる。

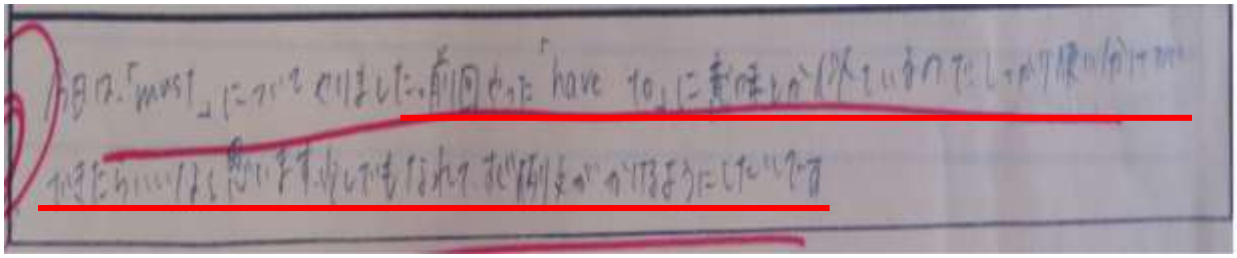
②文構造を意識して知識を習得する生徒Ａ（手だて②）

生徒は、外国人の依頼に応えるため「have to＋ 動詞の原形」や「助動詞 must」は「～しなければならない」「don't have to」は「～しなくてよい」「mustn't」は「～してはならない」という意味を表すことを学習した。これらを用いて実際に英文を作成する際に、それぞれの意味が混ざってしまうことが予想された。また、動名詞を学習した際にも、動名詞が主語になれること、一緒に使う可能性が高い単語との組み合わせについても混乱することが予想された。そこで文構造カードを用いて、語順と意味を確認した【資料７】。

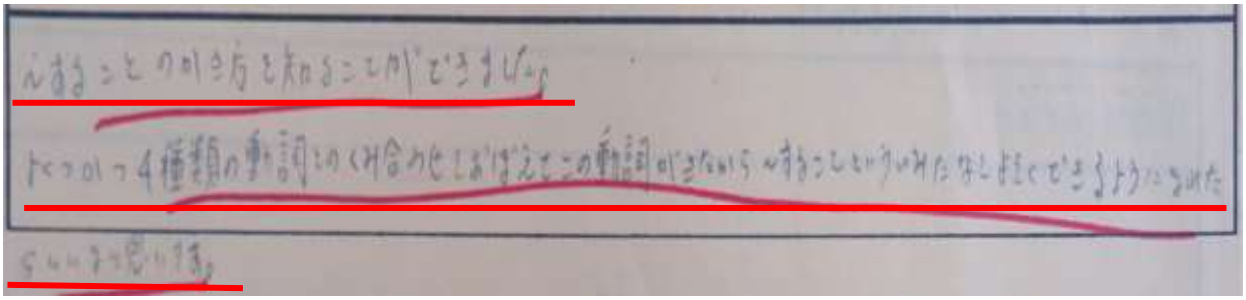


資料７　文構造カード

「must」について学習した際の生徒Ａの振り返りには「have to に意味とか似ているので、しっかり使い分けができたらいいなと思います。少しでも慣れてすぐに例文がかけるようにしたいです」と書かれており、意味の英文の使い分けを意識しようとしていることが分かる【資料８】。


【資料８】第３時　生徒Ａの振り返り

「動名詞の～ing」を学習した際の生徒Ａの振り返りには「～することの書き方を知ることができました。よくつかう種類との組み合わせを覚えて、この動詞がきたから～するという意味だなとよそくできるようになれたらと思います」と書かれており、文構造を意識して知識を習得していることが分かる【資料９】。

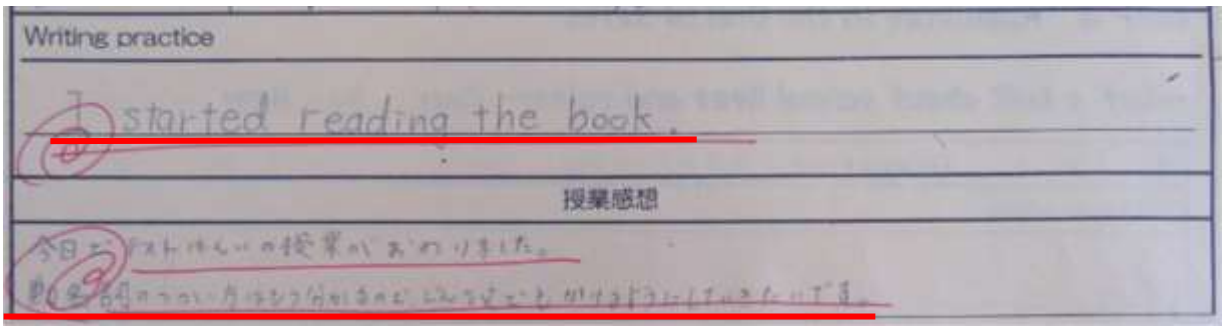

【資料９】第６時　生徒Ａの振り返り

文構造カードを用いたことで、意味と語順を確認しながら学習を進め、知識を習得することができたと考えられる。

③知識の習得を実感するする生徒Ａ（手だて③）

毎時間の授業の最後に、振り返りシートの記入の時間を設定し、授業で学習した知識を活用して英作文を行った。生徒Ａの振り返りには「動名詞のつかい方はもう分かるので、どんな文でもかけ

るようにしていきたいです」と書かれており、これまでに学習してきた知識を習得できていることを実感していることが分かる。また、英作文の欄に書かれている英文は、文法を正しく用いることができており、習得した知識を活用して表現できていることが分かる【資料１０】。



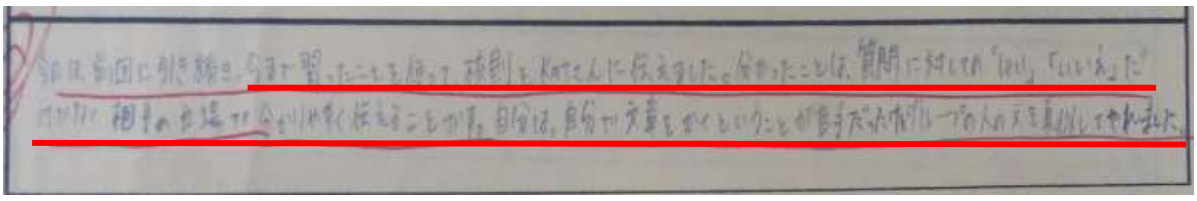
【資料１０】第８時　生徒Ａの振り返り

英作文を行う振り返りシートを継続的に活用してきたことで、生徒Ａは知識の習得を実感し、正しく活用できるようになっていることが分かる。

④仲間と関わり合いながら習得した知識を活用して表現する生徒Ａ（手だて④）

単元の最後に、ビデオレターにあった質問の返事を書く活動を行った。生徒Ａはこれまでに習得した知識を、振り返りシートを見て確認しながら英文で返事を書いていたが、少し行き詰まった表情をしていた。そこで、グループワークの場を設定し、仲間と交流しながら英作文を進めた。生徒Ａは同じグループの生徒の意見を聞きながら、自分のペースで英作文を書くことができていた【資料１１】。生徒Ａの振り返りには「今まで習ったことを使って校則を Kate さんに伝えました。分かったことは、質問にたいしての「はい」「いいえ」だけでなく、相手の立場で分かりやすく伝えるということです。自分は自分で文章を書くことが苦手だったけど、グループの人の文を真似してやれました」と書かれており、仲間と関わり合うことで英作文を完成できたことが分かる【資料１２】。

【資料１１】グループワークを行う生徒Ａ



【資料１２】第１０時　生徒Ａの振り返り

仲間と関わり合いながら英文を考える場を設定したことで、生徒Ａは習得した知識を活用して英語で表現することができたと考えられる。

４成果と課題

生徒が知識を習得する必要性を感じられる単元構想と導入の工夫を取り入れたことで、これを身に付ければ、こういう表現ができるという実感を得ながら知識を習得することができた。英作文を継続的に行ったことで、習得した知識を活用段階に進めることができた。今回は「書くこと」を中心にしたため最後に英作文で表現することになったが、依頼人の外国人と直接会って対話できると、グローバル社会で必要とされる技能が身に付くと思うので、直接的な対話活動を実践できるように精進したい。